

中・四国の体育

平成26年度 第43号

「わたしはこのように授業をしました!」

～『わたしたちの体育』の活用実践例集～



▶ **1年生** 器械・器具を使つての運動遊び
「てつぼうあそび」

▶ **1・2年生** 器械・器具を使つての運動遊び
「マットあそび」

▶ **3年生** 体づくり運動
「めざせ!良城小雑技団」

▶ **4年生** 器械運動
「マット運動」

▶ **5年生** 器械運動
「気持ちいい世界へ飛び込もう!」

▶ **6年生** 体づくり運動
「体づくり運動」

わたしたちの体育

監修 筑波大学名誉教授・元日本体育学会会長・教育学博士 成田十次郎 編集 中・四国小学校体育連盟



いつでも だれでも 使える

全ページ
オール
カラー



授業が
進めやすい!



授業の
ポイントが
よく分かる!

書き込みが
できて評価が
しやすい!



中・四国の現場の先生が編集!



中・四国の体育 第43号

巻 頭 言	中・四国小学校体育連盟第2期の出発にあたって	
	中・四国小学校体育連盟最高顧問 成田十次郎	2
第 52 回	中・四国小学校体育研究大会（鳥取大会）報告	3

「わたしはこのように授業をしました！」 ～『わたしたちの体育』の活用実践例集～

〈1 年〉	岡山県	運動の楽しさを味わうことのできる体育学習を目指して 器械・器具を使つての運動遊び「てつぼうあそび」 岡山県岡山市立幡多小学校 教諭 香春 浩明	8
〈1・2年〉	愛媛県	多様な動き方や遊び方をイメージできる授業の実践 器械・器具を使つての運動遊び「マットあそび」 愛媛県久万高原町立明神小学校 教諭 中野圭一郎	10
〈3 年〉	山口県	子ども同士のかかわり合いから、「楽しい」「できる」を実感できる体育学習 体づくり運動「めざせ！良城小雑技団」 山口県山口市立良城小学校 教諭 大賀 拓也	12
〈4 年〉	島根県	かかわり、ともに高め合う体育学習 器械運動「マット運動」 島根県出雲市立須佐小学校 教諭 孝忠 康裕	14
〈5 年〉	徳島県	「身体がうごく・みんなでうごく・心がうごく体育学習」をめざして 器械運動「気持ちいい世界へ跳び込もう！」 徳島県徳島市浜野小学校 教諭 吉原 賢治	16
〈6 年〉	香川県	『わたしたちの体育』を活用した「体づくり運動」の実践 体づくり運動「体づくり運動」 香川県琴平町立榎井小学校 教諭 宗田 活季	18
〈表現運動CD〉	広島県	生きものになりきって踊る楽しさを味わう体育学習を目指して 2年 表現リズム遊び「生きものの国で大・大・大冒険」 広島県広島市立可部小学校 教諭 藤井美佐子	20

第 53 回	中・四国小学校体育研究大会（愛媛大会）予備案内	22
	各県研究主題と主な研究会・研修会（2014年度）	24
	機関誌『中・四国の体育』のあゆみと編集後記	



中・四国小学校体育連盟第2期の出発にあたって

中・四国小学校体育連盟最高顧問 成田 十次郎

中・四国小学校体育連盟第50回高知大会の「全体指導」と「中・四国の体育」平成25年度第42号で、私は中・四国小学校体育連盟の半世紀の歴史を回顧し、これまでの時代を「世界に誇れる組織確立の時代」と位置づけました。

そして、これから次の100年までの私たちの課題として、「毎年各県の大会開催校のような優れた体育実践校を、全県下の学校に広げること」をあげました。新しい年度にあたって、ここに私の思いを重ねて述べておきたいと思います。

私たちの連盟が「世界に誇れる組織」であるとは、すでに初代の最高顧問前川峯雄先生も述べています。

1. 自主自立でゆるぎない経済的基盤をもっている。
2. 開放的で他の団体の良いところを積極的に学ぼうとする精神をもっている。
3. 極めて民主的で権力に溺れることも権力を押し付けることもない。
4. 商業主義でも権威主義でもなく真に中・四国の子どもたちの幸を原点とし、いつもそこに立ち返って子どもたちのことを考えようとしている。
5. 四国と中国との地域のつながりを大事にし、お互いに強い期待と信頼をもっている。

実際、私たちの中・四国小学校体育連盟のように、自然環境も文化も違う9県に広がる小学校の先生たちが、仲良く毎年持ち回りで研究大会を開催し、毎日の実践に裏付けられた優れた内容の教科書・準教科書・年報などの書物を出版し続けている組織は、世界に例を見ない素晴らしい組織です。

「毎年の大会開催校のような優れた体育実践校」とは、

1. 体育に熱心な「体育好き先生」がいること。
2. 校長先生のリーダーシップがあること。
3. 他の教員・職員の支援があること。
4. 保護者と地域の協力が見られること。
5. 教育委員会や関係団体の理解があること。
6. 所によっては体育関係の産業団体の支援がみられること。 などです。

私たちはこのような組織を確立し、活動を続けてきた先輩たちを誇りに思います。そこで、私たちは次の100年に向かって、各県で毎年大会を開催している優れた体育実践校を、周辺に5校10校と広げていくことが、第二期の私たちに課せられた課題で、第100回大会の頃には全県下のどの学校でも「開催校のような子どもたちの幸を原点として体育実践が展開されるようになっていること」を目指そうと述べたのです。

そして、そのような理想の実現のための第一歩は、「体育好き先生の仲間の輪を1人でも、2人でも自分たちの周りに作ろうではないか」というのが私の主張です。

さらに、中・四国小学校体育連盟第100回大会の頃には、「9県すべての小学校に1人の体育好き先生を」というのが私の希望です。

第52回 中・四国小学校体育研究大会

(鳥取大会) 報告

1 はじめに

秀峰大山のふもと、鳥取県米子市において、第52回中・四国小学校体育研究大会が開催されました。会場校として公開授業をしていただいた米子市立福生西小学校には、県内外から約500人の先生方にご参会いただき、大変実り多い有意義な研究大会となりました。

「勢いのある鳥取の体育～はずむ心 豊かな学び 確かな力～」を研究主題に設定し、児童が生き生きと目を輝かせて、自発的・自主的に課題に取り組む勢いのある体育学習を目指し、研究を重ねてきました。当日は、大変貴重なご意見をいただき、今後の教育実践・授業づくりに生かすことができる研究大会になりました。

2 期 日／平成26年10月24日（金）

3 会 場／米子市立福生西小学校
鳥取県立米子産業体育館

4 大会主題／

勢いのある鳥取の体育

～はずむ心 豊かな学び 確かな力～

5 公開授業

	学 年	領 域	単 元 名
公開授業①	1 年	ゲ ー ム	ねらえ ようかい！ 名シューター！！
	3 年	器 械 運 動	クルッ・ピタで めざせ！ シンクロ（マット運動）
	5 年	ボ ー ル 運 動	チャンスをつくって ナイスシュート！（ハンドボール）
	4 年	保 健	のぼろう！ おとなへの階だん
公開授業②	2 年	表現リズム遊び	奇想天外 いきものランドへ 出発！
	4 年	走・跳の運動	リズムで走りこせ！ ウインドラン！（小型ハードル走）
	6 年	体づくり運動	生西パワーアップ道場 ～体力向上への道～
	6 年	保 健	健康プロデューサーになろう

6 分科会・分科会テーマ

No.	分科会名	分科会テーマ	発表県
1	体づくり運動 (体ほぐし)	体や心の変化への気づきをうながし、仲間と豊かにかかわる 体ほぐしの運動	広島 鳥取
2	器械・器具を使った 運動遊び(低学年)	できたよろこびを味わわせる器械・器具を使った運動遊び	愛媛 鳥取
3	走・跳の運動 (低・中学年)	確かな技能を身につけ、仲間と豊かにかかわり合うことができ る子どもを育てる走・跳の運動	高知 鳥取
4	ゲーム (低・中学年)	仲間と楽しさを味わいながら、一人一人が基礎的な技能を身 につけ、活用できるゲームの学習	島根 鳥取
5	体づくり運動 (多様な動き・体力)	仲間とかかわり合い、体を動かす心地よさ、楽しさを味わい ながら、体力を高める体づくり運動	山口 鳥取
6	器械運動 (中・高学年)	豊かな学びと豊かなかかわりから確かな力をつける器械運動	香川 鳥取
7	陸上運動 (高学年)	「できた わかった つぎもやってみたい」と感じる陸上運動	岡山 鳥取
8	水 泳 (低・中・高学年)	確かな技能を身につけ、仲間とかかわり合うことのできる水 泳学習	岡山 鳥取
9	ボール運動 (高学年)	運動の楽しさを味わいながら、仲間とかかわり合い、高め合 うボール運動	広島 鳥取
10	表現運動 (低・中・高学年)	仲間とともにかかわり合い、心と体をはずませる表現運動	島根 鳥取
11	保 健 (中・高学年)	自分の体や生活を見つめ、気づき、考えたことを自らの生活 に生かしていける保健学習	徳島 鳥取



「できていますか？ 勢いのある体育学習」

東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 教授

松田 恵示 先生

運動遊びというものはどんな場面でも楽しいものである。難しいことに取り組むことに、おもしろみがある。つまり、主体的にチャレンジをしている。失敗してもいいのだという雰囲気だからこそ、「じゃあ、もう一回。」という気持ちになっていく。失敗してもいいという安心感と、もう一回やりたいという挑戦する気持ち、これは運動を行う際にも共通する感覚なのではないか。どんな運動やスポーツを行うときにも、失敗したからといって命を取られるわけではない。だからこそ、思いきってチャレンジできる。結果的に失敗することもある。ただ、「できるかな」「できないかな」と我を忘れて何度も続けている状態にこそ「勢い」があるのではないか。もう一つ、運動遊びには、人が揃うということがおもしろさの前提になっている。子どもたちにとって、学校という場所はみんなで集っていろいろなことをやれる、つまり「他者」と関われる場所である。そういった出会いや、共同性という部分が、おもしろさを生み出すのである。

体育の面からも考えてみたい。運動遊びなどで上手いかないというのは、体を上手く操作できていないことになる。それは、つまり、体という「他者」に出会った瞬間である。私たちにとって、体というのは自分の基盤であると同時に、思うように操作できない「他者」でもある。その「他者」と出会い、なんとかコントロールしようと思い、一生懸命になる。ここに体育という教科のおもしろみや特質がある。そして、そこに、子どもたちが体力を身に付け、様々な成長を果たすきっかけがあるのではないか。そういう意味では、「体育」と「勢い」、「運動」と「勢い」というのは非常に密接に結びついている。

では、そういった「体育」をどのようにして指導していけば良いのか。その問題を考える前に、現在、体育だけではなく、「学校」というものは社会から何を求められているのか。今、我々の目の前にいる子どもたちは、20年、30年後、大人になって社会を支えることになる。その時の社会はどのような社会で、その時に子どもたちはどのような力を欲しているのだろうか。そして、どのような大人になっていると力を発揮してくれるのだろうか。教育というのは、未来を作っていく営みである。OECD は、これからの社会は「キーコンピテンシー」が重要になると言っている。これからの時代で身に付けなければならないのは、一つ目に、ただの知識や技能ではなく、生きて働く知識や技能である。そして二つ目に、それらを習得し、生かすためにも、人間関係を構築していく力が必要である。さらに三つ目に、「自分がやらないといけないと思うからやる」という自己意志によって、自律的で継続的に行動する能力も必要である。これら三つの力を育てるためには、考えるということがとても大事になってくる。「こういうときにはこうすればいい」というマニュアルを知っているというのは、反復する力である。ただ反復するだけでは、上記の三つの力を身に付ける上で、それほど効果を発揮しない。むしろ、今の状況に応じて、今のリソースを多く使って、自分がどうすればいいか考えて行動できるという力が非常に重要になってくる。こういったことが体育だけでなく、学校に大きく求められる時代になってくる。

さて、そのような中で「勢い」というのが授業において重要なキーワードになるのではないか、というのが鳥取の提案である。子どもたちが、夢中になって元気に活動する際、子どもたちは様々

なことを考え、自分で行動しようとする。人間関係もしっかりと整えようとする。私は非常に分かりやすいアプローチだと思う。では、具体的にそれを授業の中でどのように展開することができるのだろうか。

それは今回の鳥取の研究の視点とまさに合致するところでもある。まず、「勢い」のある学習というのは子どもたちの「ねらい」が明確になっている学習である。ただ何となく活動するのではなく、目的をもって活動する時の子どもの集中力の高さを考えれば納得できると思われる。私たちはこの「ねらい」という言葉を学習指導の中で非常によく使う。考えていくのは、それが「教師のねらい」なのか、「子どものねらい」なのかということである。それらを区別することが大切である。そして、「ねらい」と「課題」は違う。

例えば、バレーボールの授業を考える際に、「作戦を工夫してバレーボールのゲームを楽しもう」というねらいを立てたとする。バレーボールは、そもそも攻防のあるもの。しかし、それだけでは、休み時間でもできる。休み時間と体育の時間のバレーボールはどこが違うのか。それは、「ねらい」を持ってゲームに入るかどうかである。ねらいを持ってゲームを行うと、そのゲームの後で必ず、「ねらい」に対してどうであったかという評価が入る。「ねらい」を持つからこそ、ゲームの仕方や自分自身の変化について考える。学習するということは、自分が変化をするということである。変化するためには、「ねらい」を持ってゲームに取り組むことが重要になる。この場合は、ただバレーボールを楽しむのではなくて、作戦を工夫してバレーボールを楽しむというのが「ねらい」になる。しかし、「作戦を工夫する」というのはどういうことなのかという課題について、さらに具体的に考える必要性が生じてくる。課題というのは「ねらい」を達成するための下位の目標になる。実際に子どもたちは、下位である課題から先に取り組むことになる。その課題と「ねらい」をつなげていくことで初めて、子どもたちの中に「ねらい」が落ちていくのである。しかし、そこが落ちていないまま授業を進めると、課題を達成することだけが授業の目的になってしまう。本来ならば、バレーボールの攻防を楽しむために作戦を工夫する力を身に付けたいのに、ただ技能のみを教えられるという状況になると、子どもたちには「勢い」も出てこない上、考えるということもなくなる。バレーボールでは、①自分のコートには落とさない、②つないで組み立てる、③相手のコートに落とす、この三つが攻防の中心になっている。そのための手段として、スパイクやレシーブ、トスなどの個人技能、コンビネーションなどの集団的な技能がある。それらの手段を使って、最後にやりたいことは、「落とさない・つないで組み立てる・落とす」という攻防である。考えたいのは、「ゲームの攻防」という上位のねらいの意味と、それを引き出すための手段として出てくる「技能」という課題の二つを区別するとともに、その二つの関係を子どもたちに教えることである。例えば、「スパイク」という言葉を、攻防の中に位置付けてみると「ボールを落とす」という意味が見えてくる。子どもたちに提示するときに、「スパイクの練習をしよう。」と言うのと、「ボールを落とす練習をしよう。」と言うのでは、どちらがより子どもたちにねらいの意味と動きをはっきり伝えることができるだろうか。意味と動きを関連させた言葉を子どもたちに教えることこそが、学習内容の明確化と言える。ねらいの意味を子どもたちに教えるには、技能を身に付けさせるよりも前に、ゲームに参加させることが必要になる。そこでまず、苦手な子どもでも「落とす・落とさない・組み立てる」の攻防に参加できるような簡易化された易しいゲームを行うのである。その中で攻防というものの意味を理解させた上で、技能の習得へ向かうという流れがよいのではないか。バレーボールの場合は、トスやレシーブの技能が非常に難しいので、キャッチ動作を入れた「キャッチバレー」という実践がよく見られる。キャッチしてもよいことで、苦手な子どもも攻防に参加できる。その中で、子どもたちが戦術を工夫したり、個人の技能を向上させたりすることの必要性を感じていく。そこでドリルを提示するなどして、習得の時間を確保していくと学びの質が上がる。

ねらいの意味と動きをセットで教えるという、学習内容の明確化の次に考えなくてはならないの

が、それをどのように教えていくのかという「学習過程」である。学習過程には継時的なものと同時的なものの二つがある。どちらが良いというものではなく、例えば、部活動などにおいては、継時的な学習過程は非常に効率的で、子どもたちは伸びる。それは、部活動には試合という明確な目標が最後にあるため、この学習過程が効果を発揮する。ところが、体育の学習においては、苦手な子どももいる。苦手な子どもにとってみたら一つ一つの技能を習得するための習得活動は意味が分からず、なかなか習得ができない。そのような場合、易しいゲームを行う中で、その子どもに合った課題をしっかりと学習していく同時的な過程の方が伸びるのではないだろうか。同時的な学習過程では、本番→振り返り→練習→本番という流れになる。しかし、授業の実際を考えると、これを45分間の中で行うには難しい。一回の本番にとどめる方が、ゆとりを持った授業計画になる。そうなる、練習の前の振り返りで、前時の本番をいかに子どもたちに思い出させるかが鍵になってくる。

ところで、「技能」とはどういう意味なのか。ここまで、技能とその技能を身に付ける必然性、この二つがセットになっていないと身に付かないのではないかと伝えた。子どもたちの気持ちを整理すると、バレーの場合では、「勝ちたい」→「得点を取りたい」→「相手コートに落としたい」→「クイック攻撃がしたい」→「トスやスパイクがうまくなりたい」。このようになる。ところが、私たちが授業を考える際にはこの順序が逆になる。基礎から応用ではなく、応用から基礎への考え方である。現在、使われている「習得・活用・探究」という言葉も、私たちは、まず「習得」があり、次に「活用」、そして「探究」があるというイメージを持っている。しかし、これは、文科省もそうではないと述べている。まず、「活用」があり、そこに「習得」の必要性を感じたから「習得」に向かう、そのような流れを念頭に置かなければならない。「しっかり身に付ける体育」というものは、子どもたちが主体的に参加する「楽しい体育」が前提になってこそ、意味をなす。子どもたちの主体性や学ぶ必然性なくして、技能のみを向上させようとするのは非常に危ない考え方になる。

最後に、子どもたちの関わりというものについて考えたい。子どもたちの世界はすでに経験していること（自の世界）でできている。新しい知識や技能（他の世界）に接することで子どもたちの世界は広がっていく。この既知と未知の境目にあり、両者の出会いを仲立ちする中間領域にあるものが学習（学びの世界）である。先生方はその学びの世界の中で子どもたちを導くガイドである。そして、ガイドをしてくれる大人だけでなく、世話をしてくれる大人、見守ってくれる大人に囲まれて子どもたちは成長していく。それらを学校・家庭・地域で役割分担するのである。授業研究というものは、この中の学校の教科の時間の研究をしているが、子ども自身はこの三つを渡り歩いて成長していく。私たちは、この三者の分担・連携というものを感ずる必要がある。この中で、先生（ガイド）と子どもたちとの関係は他の二つとは違う、非常に重要な性質を持っていると言える。社会生活を送っていくと三種類の人間関係が存在する。私はこれを「他人・他者・他己」という言葉で区別している。「他人」というのは、「知らないから関わらない人」のことを指す。これはルールがないと関われないということでもある。それとは正反対に、「知っているから関わる」のが「他己」である。「他人」でも「他己」でもない三つ目の関係が「他者」である。「他者」とは、「知らないけど関わる」人のことである。親密さで成り立つ他己関係と、ルールで成り立つ他人関係、ところが他者関係にはルールも親密さも両方が必要になってくる。先ほどの三者（学校・家庭・地域）もまさにこの関係の上で成り立っている。ルールや規範性で子どもたちを見守ってくれる他人関係の地域、親密さの他己関係である家庭、そして学校というのは他者関係の場なのである。子どもたちは「他者」と出会い、「他者」と関わるからこそ楽しいのである。

そして、関係性の強い他己関係に比べると、他者関係は弱い関係になる。教師がルールを敷き、ある段階まで子どもをしっかりと導いていたのでは関係性が強すぎる。それでは他己関係に近づきすぎる。子どもたちを「他者」との関わりの中でどう育てていくのか、私たちはそういったことをこれからはよりいっそう考えていかなければならない。

運動の楽しさを味わうことのできる体育学習を目指して

「てつぼうあそび」 1 年 器械・器具を使つての運動遊び 『わたしたちのたいいく』 P.6～9

岡山県岡山市立幡多小学校 教諭 香春 浩明

1 はじめに

体育の授業を行うときに、いつも意識していることがある。それは、子どもたちが運動の楽しさを味わうことができるような授業にしていこうことである。そのために「鉄棒遊び」では、

- ①基本的な動きができるようになる楽しさ
- ②動きを広げる楽しさ
- ③友だちとかかわる楽しさ

これら3つの楽しさを授業の中に上手に組み込めるようにしていきたいと考えた。

『わたしたちの体育』には、動きのポイントが吹き出しに書かれていたり、いろいろな運動や運動遊びの例が載っていたりする。しかも、絵はカラーで分かりやすい。この『わたしたちの体育』を活用しながら、運動の楽しさを味わうことのできる体育学習を目指して、本実践を進めていくことにした。

2 実践内容

(1) 単元名「てつぼうあそび」『わたしたちのたいいく』 1 年 P.6～9

(2) 単元目標

- 支持しての上がり下り、ぶら下がりや易しい回転をすることができるようにする。【技能】
- 鉄棒遊びに進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、場の安全に気を付けたりすることができるようにする。【態度】
- 鉄棒を用いた簡単な遊び方を工夫できるようにする。【思考・判断】

(3) 単元計画（全5時間）

時	1	2～5
学習活動	・オリエンテーション ・「やってみよう」を行う。	めあて① いろいろな鉄棒遊びをしよう。 めあて② 友だちと遊び方を選んで鉄棒遊びをしよう。

(4) 『わたしたちのたいいく』の活用場面

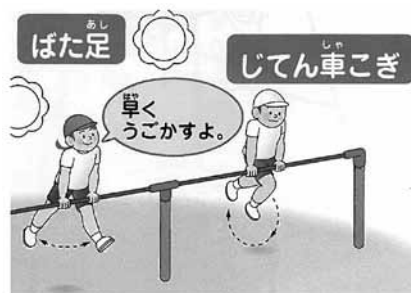
① 基本的な動きができるようになる楽しさを味わうために

低学年の鉄棒遊びでは、支持・ぶら下がり・逆さ姿勢など、鉄棒運動へと結び付く様々な基本的な動きができるように学習を進めることが大切である。『わたしたちのたいいく』には、例えば「とび上がり」「とび下り」では“ひじをのぼそう”や、「ふとんほし」では“ちからをぬこう”など、その動きができるようになるためのポイントが書かれている。そのため、子ども同士が互いに見合いながら活動する場面で、友だちの動きを見る視点がはっきりし、活発にアドバイスし合う姿へとつながることができた。また、そのアドバイスを励みに、楽しみながら活動をくり返す様子も見られ、動きの習得へとつながっていた。



② 動きを広げる楽しさを味わうために

低学年時期の子どもたちには、遊びを通してできるだけ多くの動きを経験させてやりたいと考えている。今回、鉄棒遊びの「ばた足」や「じてん車こぎ」では“(足を)早くうごかすよ”と動きの工夫の例が書かれている。足を速く動かしてやってみた後、教師が「他にもおもしろいやり方ないかな?」と投げかけると、子どもたちは、「早く」という動きの経験をきっかけに他の動きのイメージをもちやすかった。足をゆっくり動かしたり、後ろ向きに動かしたり、友だちとタイミングを合わせて足を動かしたりするなど、多様な動きが見られることにつながった。



③ 友だちとかかわる楽しさを味わうために

鉄棒遊びを友だちと選んだり、動きを組み合わせて新しい遊び方を考えたりする際に、『わたしたちのたいいく』を拡大掲示しておくことにより、共通のイラストを使いながら話し合いができるため、スムーズに活動を進めることができた。「『ふとんほし』をしながらじゃんけんしてみようよ」とか「『こうもり』でにらめっこしよう」など、イラストを使いながら自分が考えた動きを、友だちと共有してはすぐに活動に取り組み、いろいろな動きを友だちと楽しみながら試している様子が見られた。



「これを一緒にやってみようよ。」

「タイミングを合わせると楽しいね。」



3 終わりに

運動の楽しさを味わうことのできる体育学習の視点から活用方法を述べてきたが、マネジメントの点からも活用するメリットがあった。授業前に授業で行う鉄棒遊びや学習の場を見ておくと、教師と子どもたちとの間で動きや場のイメージが共有できるので、説明の時間が短縮できた。今後も『わたしたちの体育』を活用しながら、授業実践をしていきたい。

多様な動き方や遊び方をイメージできる授業の実践

「マットあそび」 1・2年 器械・器具を使つての運動遊び 『わたしたちのたいいく』 P.38～41

愛媛県久万高原町立明神小学校 教諭 中野圭一郎

1 はじめに

低学年の「マット遊び」のねらいは「運動を楽しく行いながら、基礎感覚や基本となる技能を高める」ことである。「マット遊び」に必要な基礎感覚には「腕支持感覚・逆さ感覚・回転感覚・バランス感覚・高さ感覚」などが挙げられる。しかし、これらの感覚を日常生活で体験することはほとんどないといえる。

本校では体育の学習を1・2年合同の複式で行っている。1年生にとって初めて学習する内容であっても、2年生にとっては前年度学習した内容である。そのため、1年生にとっては、身近に手本があることで相互学習の場が自然に作られている。しかし、互いに学び合える利点があるものの、動き方や遊び方が限られてしまうという欠点もある。そこで、『わたしたちのたいいく』を活用し、子どもたちが多様な動き方や遊び方を工夫し、楽しみながら基礎感覚や基本となる技能を高めることができる授業実践を行うこととした。

2 実践内容

- (1) 単元名「マットあそび」 『わたしたちのたいいく』 1年 P.38～41
『わたしたちの体いく』 2年 P.38～41

(2) 単元目標

- マットに背中や腹などをつけていろいろな方向へ転がって遊んだり、手や背中で支持して逆立ちなどをして遊んだりする。 【技能】
- マットを使った運動遊びに進んで取り組み、運動の順番やきまりを守り、友達と仲よく運動することができる。 【態度】
- いろいろな器械・器具を使った運動遊びの行い方を知り、楽しく遊ぶことができる場や遊び方を選ぶことができる。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全7時間）

時	1	2～5	6～7
学 習 活 動	オリエンテーション 準備運動 「やってみよう」	活動① ・きまりを守ってマット遊びをしよう。 活動② ・いろいろなマット遊びをしよう。	活動① ・きまりを守ってマット遊びをしよう。 活動② ・いろいろなマット遊びをしよう。 ・二人やみんなでマット遊びをしよう。

(4) 授業の実際

① 「やってみよう」での活用（1年生）

マット遊びを学習することを知らせた後で、「マットを使っていろいろな動きをやってみよう。」と投げ掛けた。2年生は昨年度の学習を思い起こして、跳んだりはねたり、転がったりとすぐに動くことができた。しかし、1年生は少し動き出しが鈍かった。2年生がしていることを真似してやってみようとする姿が見られたが、うまくいかないことが見られた。そこで両方の学年に『わたしたちのたいいく』を渡し、「見ながらやってみよう」と声を掛けた。すると、動きに変化が見られた。特に1年生3人は頭を寄せ合い、考えを出し合いながら、さまざまな動物の動きを行うようになった。



② 「活どう」の中での活用（2年生）

2年生は前転がりや後ろ転がりを互いに見せ合いながら活動を行った。子どもが、「おへそを見てまわります。」などと自分のめあてを言ってからマット遊びを行い、残っている子どもがマットのそばで見守る。その際、「前転がり」や「後ろ転がり」の技のポイントを『わたしたちのたいいく』を活用して確認するとともに、タブレット端末を活用して動画撮影し、演技した子どもも加わって振り返りをした。視点を与えて演技を見せることで、漠然と友達の演技を見るのではなくポイントを絞って見ることができていた。



3 終わりに

『わたしたちのたいいく』を活用することで、二つの成果が見られた。一つ目はイメージの広がりや映像化である。学習経験の少ない低学年にとって、動きをイメージすることが困難な場合がある。しかし、一度きっかけをつかむとイメージがあふれ出すことも多く見られる。『わたしたちのたいいく』は、そのよいきっかけを作るものであった。二つ目は評価ポイントの明確化である。イラストと言葉で技のポイントが示されていることで、演技者はもちろん評価をする子どもも視点も明確にもつことができた。動き全体を見るのが難しい低学年にとって、切り取られた一部分を見逃さない目をもたせるため『わたしたちのたいいく』のイラストと言葉が有効であった。イラストと言葉、さらに動画を組み合わせたことで、子どもは教材と豊かにかかわり、学習を楽しみ笑顔あふれる実践となった。

子ども同士のかかわり合いから、 「楽しい」「できる」を実感できる体育学習

「めざせ！良城小雑技団」 3年 体づくり運動 『わたしたちの体育』 P.70～73

山口県山口市立良城小学校 教諭 大賀 拓也

1 はじめに

用具を使った運動遊びは、動きを意図的にはぐくむ運動遊びを通して、体の基本的な動きや用具操作を総合的に身に付けることをねらいとしている。そこで、様々な用具に触れる時間を十分に確保し、しっかりとその用具を使った運動遊びを経験させたい。そして、自分が見つけた動きを交流する中で子ども同士のかかわり合いを深め、運動の楽しさを味わいながらさらなる動きの高まりをめざしたい。

2 実践内容

(1) 単元名「めざせ！良城小雑技団」 『わたしたちの体育』 3年 P.70～73

(2) 単元目標

- 体のバランスや移動、用具の操作などとともに、それらを組み合わせることができる。 【技能】
- 運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、場や用具の安全に気を付けたることができる。 【態度】
- 体づくりのための運動の行い方を工夫することができる。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全6時間）

時	学習活動	教師の支援
1	オリエンテーション ○学習のねらいと進め方、用具や場の使い方、まとめ方を知る。 ○いくつかの運動を実際に行う。	○『わたしたちの体育』を使って、学習のねらいや進め方、場の準備の仕方を説明する。 ○「学習のあしあと」を利用した振り返りカードの使い方を説明する。
2 3 4	活動① 個人技を練習し、新しい技を考えよう。 ○ボールを操作する。 ○Gボールを操作する。 ○輪を操作する。 ○なわを操作する。 (1)掲載されている運動 (2)新しい別の技 (3)アドバイス、質問	○『わたしたちの体育』に掲載されている運動を体育館の壁にパネルにして掲示する。 ○パネルにかかっている運動ができるようになったら、それを参考に新しい別の運動を考え、パネルに貼るように指導する。
5 6	活動② 友達と一緒に、新しい技を考えよう。 ○ボールを操作する。 ○Gボールを操作する。 ○輪を操作する。 ○なわを操作する。 (1)掲載されている運動 (2)新しい別の技 (3)アドバイス、質問	○運動に対するアドバイスは青の付箋、質問は赤の付箋でパネルに貼るように指導する。 ○運動の工夫ができるように、教師も一緒に運動する。
6	活動③ 良城小雑技団お披露目会（ビデオ撮影） ○一人で演技する。 ○友達と演技する。 ○学習を振り返り、まとめる。	○活動に必要感を持たせるために、表現の場を設定する。

(4) 授業の実際

① 学習活動が明確になる掲示の工夫

子どもが取り組む学習活動が明確になるようにするために、『わたしたちの体育』のP.70~P.73の運動例を拡大印刷し掲示した。子どもは、それらを見ながら運動したり、新しい運動を考えたり、主体的に活動することができていた。また、お互いの動きを見合ったり教え合ったりする姿から、運動の高まりが感じられた。



② 振り返りカードの工夫

学習の振り返りには、『わたしたちの体育』のイラスト入りの練習カードを使用し、表面はできた運動のチェック、裏面に振り返りを書くようにした。毎時間、進んで記録ができ、意欲の向上や継続にもつながった。より分かりやすい言葉で表現しようと言語感覚の意識も高まった。



③ 体育授業での板書の工夫

その時間のめあて、学習活動、時間配分など、明確にした板書にすることで、子どもが時間いっぱい自分の力で学習に取り組めるようにした。また、子どもたちの活動の様子が分かるように運動の写真を掲示することで、個々のめあてを確認しながら活動することができた。



3 終わりに

本実践では、『わたしたちの体育』を用いたことで、視覚的に様々な運動を捉え、主体的に運動に取り組めたという点で成果が得られた。一人での運動から二人組、三人組というように運動の幅を広げたことで、どの子どもも楽しみながら活動することができた。同じ用具を複数使ったり、異なる用具を組み合わせたりする姿も見られ、運動への意欲だけでなく、用具を巧みに操作する子どもたちの姿が見られた。



かかわり、ともに高め合う体育学習

「マット運動」 4年 器械運動 『わたしたちの体育』 P.58～63

島根県出雲市立須佐小学校 教諭 孝忠 康裕

1 はじめに

体育科の学習で、子どもたちがやる気を出し、楽しさを感じるようにする方法の1つとして、子どもたち同士のかかわりを大切にすることが挙げられると考える。練習して、自分だけ技ができるようになって終わりではない。友達がするのを応援する。友達がするのを補助する。友達の動きを見てアドバイスする。このようなかかわりが、クラス全体を様々な意味で高めることにつながる。また、自分の身体の動きがどうなっているかを、客観的に知ることでもある。そして、それが、技ができるようになるため、技を美しくするため、とても有効な手段となり、一人ひとりの次への課題にもなる。

今回、『わたしたちの体育』のイラストや例示、その解説を活用しながら、子どもたち同士がかかわり、ともに高め合っていくような体育学習を目指し、実践を行った。

2 実践内容

(1) 単元名「できる技を組み合わせて連続技に挑戦しよう（マット運動）」

『わたしたちの体育』 4年 P.58～63

(2) 単元目標

- きまりを守り、友達とかかわりながら、マット運動に進んで取り組もうとしている。

【態度】

- 動き方や技のポイント、練習の仕方を知るとともに、自分の力に合った課題や練習方法、場を選ぶことができる。

【思考・判断】

- 基本的な回転技や倒立技ができる。

【技能】

(3) 単元計画（全6時間）

時	1	2	3	4	5	6
学習活動	○オリエンテーション ・学習の進め方を確認する。 ・「やってみよう」を行う。	○いろいろな技ができるようになろう（側方倒立回転を中心にして） ・「やってみよう」など下位運動を行う。 ・活動①のマット運動を行う。 ・活動②のマット運動を行う。 ・振り返りをする。			○できる技を組み合わせて連続技に挑戦しよう ・「やってみよう」など下位運動を行う。 ・自分が考えた組み合わせの練習をする。 ・発表会をする。 ・振り返りをする。	

(4) 授業の実際

① オリエンテーションでの活用

オリエンテーションで、『わたしたちの体育』を見ながら、単元全体の流れを確認した。また、『わたしたちの体育』には、技の名前、その技のやり方（どんな技か）、ポイントが示されていることも確認した。

その後、全員で「やってみよう」に挑戦した。その中の「かえるの足打ち」と「かべ登り」は、授業の始めに継続して行った。

② 子どもたち同士のかかわりでの活用

グループで学習を進めた。写真にあるように、『わたしたちの体育』と比べながら友達の技を一生懸命に見ていた。そして、練習が終わった友達に積極的に声をかける姿があった。子どもたちの振り返りからも、「すごくきれいだった」「足が伸びていた」という感想や、「もっと勢いをつけたほうがいい」といったアドバイスなど様々な交流があったことがわかる。

また、場作りでも『わたしたちの体育』が役立った。写真のように、ゴムを使って「側方倒立回転」の練習を考えて行っていた。



③ 振り返りでの活用

学習の最後には、『わたしたちの体育』に振り返りを書いた。

【子どもたちの振り返り（「学習のあしあと」）から】

- ・他の人にアドバイスをすることができてよかった。次もアドバイスしたい。
- ・（発表会の後）感想で「きれい」と言ってもらってうれしかったです。側転で「もう少しつま先を高く上げたほうがいいよ」と言われたので、これからそれをがんばりたいです。
- ・今日は、アドバイスをしたりされたりして、みんなが上手になったので、とても良かったです。私は、もう少し軸足をしっかりしたいです。
- ・開脚前転で、まっすぐに足が伸びるようにしたら上手にいくと思いました。
- ・自分の発表をして〇〇さんからアドバイスをもらって良かったです。
- ・発表では上手にできたと思うし、自分が考えためあてを守れて良かったです。応援もできたし、アドバイスもみんなに言えたから良かったです。
- ・私は、スピードが遅かったので、今度からはやくしたいと思いました。
- ・練習してアドバイスをされて、それがちゃんとできたので良かったです。

毎時間継続することで、課題を意識することができた。自分の成長、またグループの成長を感じていた。

3 終わりに

『わたしたちの体育』を活用することにより、子どもたちが、視覚的に理解するのに役立った。また、いくつかの技が例示されているので、技の名前を正しく知ることができた。かかわりの中で、技能を習得していく場面では、友達の技と『わたしたちの体育』のイラストを比べながら考え、友達に声をかけていた。思考・判断の面で、子どもたちの進歩が見られた。イラスト、例示、解説などが有効だった。一人の友達が練習するのをグループみんなで見るとして、声をかける。授業の中で言語活動が盛んになり、みんなで取り組んでいるという一体感が感じられた。そして何より、友達とのかかわりが支えになり、やる気を持って取り組む、意欲的な子どもたちの姿が見られたことがよかった。今後も、『わたしたちの体育』を活用しながら、かかわり、高め合う学習を進めていきたい。

「身体がうごく・みんなでうごく・心がうごく体育学習」をめざして

「気持ちいい世界へ飛び込もう！」5年 器械運動 『わたしたちの体育』P.42～47

徳島県徳島市渋野小学校 教諭 吉原 賢治

1 はじめに

飛び箱運動は、自己の能力に適した技に挑戦し、それを達成したときに楽しさや喜びを味わうことができる。また、その過程における、工夫や試行錯誤、友だちとの賞賛のし合い、励まし合いも同様である。しかし、「飛び箱が怖い」「跳べない」といった理由から飛び箱運動に嫌悪感や苦手意識を抱いている子どもも多い。そこで、子どもの意識の流れに沿って学習を進め、いろいろな飛び越し方で、「フワッと」した空中感覚、「クルッと」まわる回転感覚や逆さ感覚、「ピタッと」とまる感覚など、非日常の気持ちのよい感覚を味わいながら、動きのおもしろさに気づかせたいと考えた。



2 実践内容

(1) 単元名「気持ちいい世界へ飛び込もう！」『わたしたちの体育』5年 P.42～47

(2) 単元目標

- 基本的な支持飛び越し技を安定して行うとともに、その発展技を行うことができるようにする。 【技能】
- 飛び箱運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。 【態度】
- 自己の課題の解決の仕方を知り、自己の課題に応じた場を選び、工夫して活動できるようにする。 【思考・判断】

(3) 単元計画（6時間）

時	学習活動	教師のはたらきかけと活動の様子
やってみる	○学習のねらいや進め方を知る。 ○「やってみよう」をする。 ・かえるの足打ち・逆立ち、馬跳び等 ○飛び箱運動につながる動きをする。 ○学習のまとめの仕方について知る。	○『わたしたちの体育』を使って、学習のねらいや進め方を説明する。 ○きまり、学習の場、安全面について理解させる。 ○「学習のあしあと」の使い方を説明する。
やってみる・ひろげる	活動① 自分の能力に応じた場を選んで技に挑戦しよう。 ○「やってみよう」をする。 ○自分の能力に応じた場を選んで技に挑戦する。 ○友だちと見せ合ったり、教え合ったりする。 ○感じたことや気づいたことを友だちと共有する。	○自分の動きを振り返ることができるよう、ICT機器を活用する。 ○友だちと動きを見せ合うことで、お互いに考えを広げる場面をつくる。



ひろげ る・ふ かめ る	活動② 技のできばえを高めたり，新しい技に挑戦したりしよう。	
	○「やってみよう」をする。 ○技にこだわりをもち，できばえを高めたり，新しい技に挑戦したりする。 ○友だちと技を合わせたり，見せ合ったりする。	○技のできばえについて，友だちと気づきを伝え合いながら活動を進めていけるように言葉がけをする。 ○自他の成長を認め合えるよう，賞賛する。

(4) 授業の実際

① 動きのおもしろさを「感じる」工夫

『わたしたちの体育』の「やってみよう」(P.42)に載っている動きを中心に，跳び箱運動につながる楽しい動きを多く取り入れ，進んで取り組めるように意欲付けをした。特に，馬跳びは，工夫を加えることで手軽に「フワッと」を感じることができるので，動きのおもしろさを感じられるように，導入段階で時間をかけて様々な運動を行った。



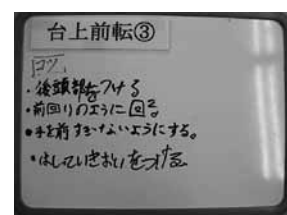
② 個の課題に応じた場の工夫

動きのおもしろさを味わい，個の課題に応じた場をつくりだせるよう，『わたしたちの体育』を参考にしながら，様々な工夫をした。安全面にも配慮しつつ，跳び箱の高さや補助具の選択ができるようにし，子どもたちの様子を見取りながら，毎時間ごとに少しずつ変化を加えていった。



③ 学び合いの工夫～技のコツの共有～

子どもたち同士での話し合いの場をもつことで，着手や着地など，技のコツについての共有ができるようにした。技ごとにホワイトボードに記入させ，掲示することで，学級全体で共有を図った。教師の言葉や『わたしたちの体育』，掲示物（『わたしたちの体育教師用指導書』指導のポイントP.82，83を参考に作成）などから得られるやり方やコツも，ともに挑戦する友だちからの言葉となれば，より実感できていたようである。



3 終わりに

『わたしたちの体育』の言葉やイラストから，子どもたちは技に対するイメージをつかむことができていた。イメージをつかめたことによって，自分がやりたいこと，練習すべきところがはっきりし，意欲的に運動に取り組むことができていたように思う。また，子どもの意識の流れに沿って学習を進めたことで，友だちとの学び合いや賞賛のし合いも活性化し，本実践テーマでもあった，「身体がうごく・みんなでうごく・心がうごく体育学習」に近づけたのではないかと考える。

今後も，『わたしたちの体育』を効果的に活用し，学習の見通しやイメージをもたせながら，子どもの意識の流れに沿った体育学習を目指していきたい。



『わたしたちの体育』を活用した「体づくり運動」の実践

「体づくり運動」 6年 体づくり運動 『わたしたちの体育』 P.4～5 P.20～25

香川県琴平町立榎井小学校 教諭 宗田 活季

1 はじめに

高学年の体づくり運動は、「体ほぐしの運動」、「体力を高める運動」を行う。「体ほぐしの運動」では、手軽な運動や律動的な運動を行うことを通して、自分の体の状態に気付いたり、体の調子を整えたり仲間と交流したりすることをねらいとしている。「体力を高める運動」では、体を柔らかくする運動、巧みな動きを高める運動、力強い動きを高める運動、動きを持続する能力を高める運動を通して、体力を高めることを直接のねらいとしている。

本実践では、主に「体ほぐしの運動」の時間に、運動の種類を紹介したり運動のイメージをもたせたりするために『わたしたちの体育』を活用した。「体力を高める運動」の時間には、紹介されている動きの中から、手押し車を採用した。

2 実践内容

(1) 単元名「体づくり運動」『わたしたちの体育』 6年 P.4～5 P.20～25

(2) 単元目標

- 心と体の関係に気付いたり、体の調子を整えたり、仲間と交流したりするための手軽な運動や律動的な運動をすることができる。【技能】
- ねらいに応じて、体力を高める運動をすることができる。【技能】
- 運動に進んで取り組み、助け合って運動したり、場や用具の安全に気を配ったりできる。【思考・判断】
- 自己の体の状態や体力に応じて運動の行い方を工夫したり選んだりできる。【態度】

(3) 単元計画（全7時間）

時	1	2	3	4	5	6	7
	体ほぐしの運動		体力を高める運動				
学習活動	体ほぐしの運動に取り組む、運動すると心が軽くなったり体の力を抜くとリラックスできたりすることなど、心と体が関係し合っていることに気付く。		巧みな動きを高めるための運動や力強い動きを高めるためのいろいろな運動に取り組みながら、体力の高め方を知る。			これまでに行った動きの中から、自分で選択した運動に取り組み、自分の課題に応じて運動の行い方を工夫して体力を高める。	

(4) 活用の実例

① 「体ほぐしの運動」での活用

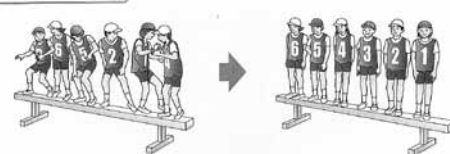
体ほぐしの運動を行う際、『わたしたちの体育』（P.3～4）に紹介されている例を参考に運動を行った。

高学年になると、友だちや異性と手をつないだり体を触れ合ったりさせながらの運動に抵抗がある子どももあり、仲間との交流をねらう場面では、自然と友だちとかかわる



ことができるような工夫が必要である。そこで、平均台での並べ替えでは、チームに分けて競争するなどゲーム性をもたせることで、自然と協力し合いながら活動することができるようにした。友だちにアドバイスをしたり、アドバイスをもらったりするなどして、成功することで一体感が生まれ、友だちとかかわり合って運動する楽しさを感じている児童が多くいた。円形コミュニケーションでは、クラス全員で手をつなぎ、「あんたがたどこさ」のリズムに合わせて、立ったり座ったりする運動を行った。ペアからグループ、そして全体へと段階的に運動していくことで、男女が抵抗なく手をつないで活動している様子も見られた。

平均台で並びかえ



【P.4～5】

円形コミュニケーション



【P.4～5】



② 「体力を高める運動」での活用

力強い動きを高める運動では、手押し車を行った。初め、友だちや自分の体重が支えられない子どもがいたが、毎時間行う中で、進む距離を伸ばすことができるようになった。

体力向上につながる運動を考えさせる際に『わたしたちの体育』（P.22～23）をみんなで確認し、「坂を作る」運動を紹介した。児童からは、坂だけでなく、「段を作る」などの工夫が出された。



③ 体育と日常の運動とをつなげる場面での活用

本校では、雨天時の昼休みに体育館を開放しており、多くの子どもが体育館で遊んでいるが、鬼ごっこやドッジボールなど遊びが固定化されてきている。そこで、体育の学習と日常生活での運動習慣をつなげる工夫として、「体づくり運動」の学習後、『わたしたちの体育』から、「体づくり運動」のページを拡大して掲示し、運動紹介コーナーを体育館に設けた。以前は、鬼ごっこやボール遊びが主だったが、掲示された『わたしたちの体育』の運動例を参考に、「体ほぐし運動」やダブルダッチなどをして遊ぶ子どもの姿が見られるようになった。「体ほぐしの運動」は友だちと協力して行う運動であるので、自然と友だちとコミュニケーションを取りながら仲間を増やし、時には異学年の友だちとかかわりながら遊ぶ姿も見られた。



3 終わりに

高学年になると、「体ほぐしの運動」で手をつないだり密着したりすることに抵抗をもちはじめられる。『わたしたちの体育』には、運動がイラストやポイント付きで紹介されているので、児童の興味・関心をもたせることができ、自然と「体ほぐしの運動」に取り組むことができた。また、体育の時間に体験した運動例を目に見える形で掲示しておくことで、子どもたちは遊びの中でも運動に進んで取り組むようになった。今後も『わたしたちの体育』を効果的に活用し、子どもたちの体力をさらに高める学習ができるよう実践を積み重ねていきたい。

生きものになりきって 踊る楽しさを味わう体育学習を目指して

「生きものの国で大・大・大冒険」 2年 表現リズム遊び 『わたしたちの体いく』 P.22～25

広島市立可部小学校 教諭 藤井美佐子

1 はじめに

低学年の表現リズム遊びにおいて、曲に合わせて表現したり、踊ったりすることは楽しく表現できる児童が多いように思う。これはテレビの影響もあり、ダンスグループに興味のある児童も多い。しかし、身近な生活の題材から、その主な特徴をとらえて、イメージし、なりきって表現することを、苦手とする児童が多く見られる。そこで、何かになりきって表現リズム遊びをすることの楽しさを味わってほしいと思い、児童にイメージしやすい生きものを題材に選び、実践した。

2 実践内容

(1) 単元名「生きものの国で大・大・大冒険」『わたしたちの体いく』 2年 P.22～25

(2) 単元目標

- 軽快なリズムに乗って踊ったり、生きものになりきって全身で踊ったりすることができる。 【技能】
- 運動に進んで取り組み、誰とでも仲良く踊ったり、場の安全に気を付けたりすることができる。 【態度】
- 簡単な踊り方を工夫できるようにする。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全4時間）

時	学 習 活 動
1	○オリエンテーション ・学習のめあてや進め方を理解し、単元全体の見通しをもつ。 ・1年生の運動会で踊ったダンスを思い出して踊ってみる。 ・学習の振り返り、次時への興味をもたせる。
2 ～ 4	1 「やってみよう」を行う。 ① 音楽に合わせて、先生と「かがみあそび」(P.22)をして心と体をほぐす。 ② 音楽に合わせて、友達と「かがみあそび」(P.22)をして表現リズム遊びに必要な動きを身に付けさせる。 2 活動① ① 児童書(P.22～23)を参考に生きものの動きのイメージを確認し合う。 ② 全員で同じ生きものになって、生きものの国で大冒険する。 3 活動② ③ 児童書(P.24～25)を参考に生きものの動きのイメージを確認し合う。 ④ ペアやグループで、生きものになりきって、全身で表現する。 ペアで、まねっこ恐竜。   私たちは、何に変身したでしょう？ グループで蝶に変身!! 4 学習を振り返る。

(4) 『わたしたちの体いく』を活用した授業の実際

① 導入「やってみよう」の工夫

『わたしたちの体いく』 P.22 『表現運動CD』 CD：V-2

担任と同じ動きをする「かがみあそび」は、1年生の表現リズム遊びの学習で慣れているため、楽しい雰囲気をつくりながらリズムにのって踊ることができた。子ども同士の「かがみあそび」は、第1時では、恥ずかしがっていたり、体が動かなかったりした児童が数人いたため、児童書に掲載されている動きを紹介し、踊りのヒントカードを掲示した。参考にして表現している児童も多く見られ、リズム遊びをスムーズにすることができた。



【P.22 かがみあそび】



【P.22 ヒントカード】



【P.22 生きものイメージカード】

② 活動①での活用

『わたしたちの体いく』 P.22 『表現運動CD』 CD：I-10,11,12

「生きものの国を大・大・大冒険」するために、児童書「生きものイメージカード」を掲示して、生きもののイメージをしっかりとせた。活動①は、みんなで同じ生きものになって表現した。体だけでなく、顔も心も生きものになりきるように声をかけることで、全身で生きものに変身することができた。全身で表現できている児童を称賛し、全員の前で紹介し、全員で同じ動きを練習した。この活動を繰り返し取り入れることで、子どもたちの動きが活発になり、思いきり生きものになりきるすることができた。また、CDを活用することで、動きがよりリズムカルに表現できた。

③ 活動②での活用

『わたしたちの体いく』

P.24～25

ペアやグループで、表現するために、ここでも児童書「生きものイメージカード」を



【P.25 生きものイメージカード】



【写真1 かがみあそび】

掲示して、生きもののイメージをしっかりとせた。児童書を参考に生きもので「かがみあそび」(写真1)をさせた。同じ生きものを選んだペア同士が合体し、グループで一つの生きものに変身しているグループも見られた。全身で生きものになりきっている友達の、よい動きや特徴のある表現を意識させた。よい動きや特徴のある表現を紹介することで、他の子どもたちの動きが、より一層生きものに近付き、全身で表現することができた。

3 終わりに

今回の実践は、子どもたちが生きものになりきるためのヒントが、『わたしたちの体いく』に掲載されているお陰で、表現リズム遊びのイメージをもたせることができた。題材の特徴を知るための手だてとなり、子どもたちの自由な発想や表現リズム遊びの幅を広げていくきっかけとなった。また、私自身が『わたしたちの体いく』の使い方を知り、深めることができ、これからの体育科授業の実践に生かしていきたい。

中・四国小学校体育連盟創立60周年記念 第53回 中・四国小学校体育研究大会（愛媛大会）

第39回 愛媛県小学校教員体育研修会

第26回 松山市小学校体育研究発表大会

えがお 大会主題 愛顔いっぱい 体育学習 －豊かななかかわりを通して－

【愛媛県下共通の研究視点】

仲間との
豊かななかかわり

教材との
豊かななかかわり

豊かななかかわりを支える
ICTの活用

1 期 日 平成27年10月30日（金）

2 会 場 松山市立椿小学校
〒790-0941 松山市和泉南6丁目1番47号 TEL 089-957-1430

3 日程（予定）

7:45 ～	8:15 8:35	8:50 9:35	9:50 10:35	10:50 11:05	11:15 11:55	11:55 12:45	12:50 13:30	13:35 14:15	14:35 14:55	14:55 15:15	15:15 16:25	16:25 16:45
受 付	全 校 活 動	提 案 授 業 ①	提 案 授 業 ②	基 調 提 案	分 科 会 Ⅰ 授 業 協 議	昼 食	分 科 会 Ⅱ		全 体 会			
							県 内 提 案	県 外 提 案	開 会 行 事	全 体 指 導	講 演	閉 会 行 事

4 講 師 全体指導
中・四国小学校体育連盟最高顧問
筑波大学名誉教授 教育学博士 成田十次郎 先生
講 演
愛媛大学教育学部 准教授 日野 克博 先生

5 提案授業

提案授業①	学年	領域	場所	提案授業②	学年	領域	場所
	1	ゲーム	運動場		1	体づくり運動	運動場
	2	走・跳の運動遊び	運動場		2	表現リズム遊び	体育館
	3	器械運動（鉄棒）	運動場		3	保健（健康な生活とわたし）	自教室
	4	器械運動（跳び箱）	体育館		4	保健（育ちゆく体とわたし）	自教室
	5	保健（けがの防止）	自教室		5	ボール運動	運動場
	6	保健（病気の予防）	自教室		6	陸上運動	運動場

6. 分科会（県内・県外提案）

No.	分科会	分科会テーマ	担当
1	体づくり運動 (体ほぐし)	仲間との交流を通して、体を動かす楽しさや心地よさに気付かせることで、進んで運動に取り組もうとする愛顔いっぱいの子どもを育てる	大洲市 島根県
2	器械・器具（低）	運動遊びの楽しさを十分に味わわせることで、器械運動につながる感覚や動きを身に付け、伸び伸びと体を動かす愛顔いっぱいの子どもを育てる	今治市・越智郡 高知県
3	走・跳の運動 (低・中)	走・跳の運動に関する基本的な動きを身に付けさせることで、運動することの楽しさや心地よさを味わう愛顔いっぱいの子どもを育てる	西予市 岡山県
4	ゲーム (低・中)	ゲームの基礎・基本を身に付けさせることで、仲間と支え合いながら「わかる」「できる」楽しさや喜びを追求する愛顔いっぱいの子どもを育てる	東温市 山口県
5	体づくり運動 (多様な動き・体力)	学びの場を工夫し、様々な運動の楽しさや基本となる動きを身に付けさせることで、自他の伸びを実感する愛顔いっぱいの子どもを育てる	新居浜市 鳥取県
6	器械運動 (中・高)	器械運動の楽しさを仲間とともに追求させることで、できる喜びを分かち合う愛顔いっぱいの子どもを育てる	宇和島市 徳島県
7	陸上運動 (高)	仲間とのかかわりを大切にしながら、記録に挑戦させたり、競い合わせたりすることで、運動の楽しさや喜びを感じ合う愛顔いっぱいの子どもを育てる	西宇和郡 徳島県
8	水泳 (低・中・高)	水泳に必要な運動感覚や動きを身に付けさせることで、仲間とともにひたむきに運動に取り組む愛顔いっぱいの子どもを育てる	伊予市・伊予郡 高知県
9	ボール運動 (高)	ボール運動の楽しさや喜びをチームで共有させることで、仲間と協力しながら夢中になって運動する愛顔いっぱいの子どもを育てる	松山市 香川県
10	表現運動 (低・中・高)	仲間とのかかわりを通して、豊かな身体表現を引き出すことで、心身を解放して踊る楽しさや喜びを味わう愛顔いっぱいの子どもを育てる	西条市 広島県
11	保健 (中・高)	心と体の発達や健康で安全な生活を送るための知識を身に付けさせることで、自ら考え振り返ろうとする愛顔いっぱいの子どもを育てる	四国中央市 香川県
12	異学年合同	異学年の仲間と豊かにかかわり合わせることで、「わかった」「できた」という喜びをともに感じる愛顔いっぱいの子どもを育てる	上浮穴郡 南宇和郡

各県研究主題と主な研究会・研修会（2014年度）

香川県	【研究主題】	すべての子どもに「できる」「わかる」「かかわる」喜びを ～子どもの意識の流れを大切に授業づくり～
	7月28日	香川県小学校教育研究大会 体育部会夏季研修会 パネルディスカッション「子どもの学びに寄り添い、授業に活きる指導計画の在り方」 講演「体育科教育に求められること」 分科会，全体指導
徳島県	【研究主題】	身体がうごく・みんなでうごく・心がうごく体育学習 ～意味づけされていく子どもの姿と舵取りの明確化～
	7月25日	第60回 徳島県小学校体育指導者講習会 研究主題・小教研体育部会指定校の説明 講演（講師 白旗 和也 日本体育大学教授） 分科会，全体会
高知県	【研究主題】	運動好きな子どもを育てる体育学習 ～達成感を味わう授業の創造～
	8月8日	第13回 高知大学教育学部附属小学校夏季学習交流会 講義「これだけは知っておきたい！体づくり運動の基本」 （平成26年度体育実技指導者講習会より） 実技①「体ほぐしの運動」 実技②「体力を高める運動」 実技③「多様な動きをつくる運動（遊び）」 実技④「多様な動きをつくる運動（遊び）」
愛媛県	【研究主題】	「愛顔（えがお）いっぱい 体育学習」～豊かなかかわりを通して～
	8月8日	第38回 愛媛県小学校教員体育研修会 分科会①「体づくり運動（ほぐし），器械・器具，走・跳の運動，ボール運動，水泳，表現運動」 分科会②「体づくり運動（体力），器械運動，陸上運動，ゲーム，異学年合同，保健」 実技研修
	10月31日	第53回 中・四国小学校体育研究大会（愛媛大会）第2回事前研究会 公開授業①，公開授業②，授業別分科会，全体会
岡山県	【研究主題】	運動のおもしろさを軸とした新しい体育学習の創造 ～挑戦課題をもとに思考錯誤できる授業づくり～
	8月21日・22日	平成26年度 岡山県小教研体育部会・岡山県小学校体育連盟 夏季研修会 中・四国大会分科会提案発表リハーサル及び協議・研究発表 講演「新しい学習観から見た体育学習」（講師 松田 恵示 東京学芸大学教授） ポスターセッション
島根県	【研究主題】	「動いて気づく できていかす しまねっ子 ～主体的に学ぶ力をつけ，追求できる子どもを育てる体育学習～」
	7月24日	第25回 島根県小学校体育授業研修会 公開授業① 1年 体づくり運動「多様な動きをつくる運動遊び」 公開授業② 6年 ボール運動「ゴール型」
	8月1日	第50回 島根県学校ダンス指導者研修会 実技研修①「表現運動・ダンス」（講師 中村 なおみ 東海大学体育学部体育学科専任教授） 実技研修②「フォークダンス」（講師 島根県フォークダンス連盟公認指導者）
広島県	【研究主題】	「わかる・できる・かかわり合う」体育学習
	8月1日	第80回 夏季体育研修会 講義「これからの小学校体育」，西部地区実技講習会報告 実技研修「シュートゲーム」「表現・リズム遊び」「体づくり運動」
	10月3日	第38回 広島県小学校体育研究大会 授業公開，分科会，全体会（全体講評・記念講演）
山口県	【研究主題】	山口から体育維新の風を…「楽しい体育」から『もっと楽しい体育』へ ～動きと学びを確かに高める体育学習～
	7月28日	第8回 山口県女子教員のための体育研修会 講話・実技指導：「ボール運動」（講師 白旗 和也 日本体育大学教授）
	8月26日	第10回 山口県小学校体育実技研修会 講話・実技指導：「器械運動の動きと学び」（講師 水島 宏一 東京学芸大学教育学部准教授）
鳥取県	【研究主題】	「勢いのある鳥取の体育 ～はずむ心 豊かな学び 確かな力～」
	8月11日・12日	鳥取県小学校体育研究会 夏季一泊研修会 講演「勢いのある体育学習の授業づくり」，実技「授業づくりのアイデアと指導のポイント」 中・四国大会基調提案・鳥取大会領域別発表（11領域）

機関誌『中・四国の体育』のあゆみと担当県

1号…昭和47年 香川県（創刊号） （第10回研究発表大会記念）	22号…平成5年 高知県
2号…昭和48年 岡山県	23号…平成6年 山口県
3号…昭和49年 広島県	24号…平成7年 鳥取県（40周年号）
4号…昭和50年 高知県（20周年号） （体育連盟発足20周年記念）	25号…平成8年 愛媛県
5号…昭和51年 鳥取県	26号…平成9年 島根県
6号…昭和52年 山口県	27号…平成10年 香川県
7号…昭和53年 島根県	28号…平成11年 岡山県
8号…昭和54年 愛媛県	29号…平成12年 徳島県
9号…昭和55年 香川県	30号…平成13年 広島県
10号…昭和56年 岡山県	31号…平成14年 高知県
11号…昭和57年 徳島県	32号…平成15年 山口県
12号…昭和58年 広島県	33号…平成16年 広島県
13号…昭和59年 高知県	34号…平成17年 高知県（50周年号）
14号…昭和60年 山口県（30周年号）	35号…平成18年 山口県
15号…昭和61年 鳥取県	36号…平成19年 鳥取県
16号…昭和62年 愛媛県	37号…平成20年 愛媛県
17号…昭和63年 島根県	38号…平成21年 島根県
18号…平成元年 香川県	39号…平成22年 香川県
19号…平成2年 岡山県	40号…平成23年 岡山県
20号…平成3年 徳島県	41号…平成24年 徳島県
21号…平成4年 広島県	42号…平成25年 広島県
	43号…平成26年 高知県

編集後記

平成23年度からの新学習指導要領完全実施に向けて、中・四国小学校体育連盟によって改訂されました『わたしたちの体育』『表現運動CD』は、多くの学校で活用されています。指導内容の明確化や体系化、運動の取り上げ方の弾力化、全学年における「体づくり運動」の指導など、いくつかの改訂の要点をわたしたち教師が理解し、子どもの健やかな心と体を育てる体育科教育を充実させていく必要があります。

「中・四国の体育」第43号では、中・四国9県の現場の先生方の協力を得て、『わたしたちの体育』を活用した実践を掲載し、みなさんの日常の体育の授業で役立てていただきたいと考えました。是非、ご一読いただき、各県各校で一人でも多くの先生方にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、「中・四国の体育」第43号の発行にあたりまして、執筆をお願いした先生方、各県において取りまとめをしていただいた先生方、ご多用の中ご協力いただき、誠にありがとうございました。

中・四国の体育 第43号（平成26年度）

中・四国小学校体育連盟

発行／平成27年3月

印刷／牟禮印刷株式会社

